

1920年代国際的平和運動の中の日米女性に関する研究

—メソジスト監督教会女性海外伝道協会に焦点化して—

Study of American and Japanese Women in the 1920s International Peace Movement:

Focus on the Woman's Foreign Missionary Society of
the Methodist Episcopal Church

大森 秀子
Hideko OMORI

はじめに

第一次世界大戦後、アメリカで女性参政権運動によって両性間の平等が前進し、女子高等教育の進展を通して専門職の女性が生み出される時代は、人種・民族・宗教・文化といった要素を考慮することなしに、社会変化を起こすことの難しさが認識された時代でもある。デーナ・ロバートによれば、1920年代のアメリカ女性宣教団体の宣教スローガンは世界親善（World Friendship）に置かれ、「『親善』は『シスターフッド』という旧来好まれたフレーズと違い、ジェンダー中立の言葉となった。」¹アメリカ女性宣教団体が世界親善を推進する上で、エキュメニカルな教派提携や男女協同、女性宣教師と現地女性とのパートナーシップといった関係づくりが求められた。この関係づくりは世界の平和を擁護しようとする改革運動のうねりの中で、伝道地の女性の地位向上、特に教会女性リーダーを育てるという教育的営みを必須とした。本研究は20世紀前半の強力な女性宣教団体といわれたメソジスト監督教会女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church; WFMS）を取り上げ、1920年代国際的平和運動の中の日米女性による宣教活動を検討し、女子高等教育を受けた日本人キリスト者の果たした史的役割を明らかにすることを目的としている。

20世紀前半のアメリカ女性の国際的な平和運動の代表的な研究として、杉森長子はフェミニズムとパシフィズム（人権尊重主義に根ざす平和主義）への覚醒と融合のメカニズムを明らかにし、軍備縮小、平時の社会的経済的政治的改革、世界的な連帯等について解明している。そこでは教養ある日本女性が参加した汎太平洋婦人会議にも言及されている²。アメリカ女性宣教史の観点からは、千葉浩美がロバートの女性宣教師研究に即して、両大戦間期のアメリカ女性海外宣教における世界親善の志向とアメリカ国内の「戦争の原因究明と解決策創出のための全国委員会（National

Committee on the Cause and Cure of War; NCCCCW)」(1925年結成)における超教派の女性組織の役割を詳述している³。キリスト教教育の視座をもつ研究として、小川智瑞恵はエキュメニカル運動の流れの中で二つの世界宣教会議の声明を考察し、エルサレム世界宣教会議(1928年)に文化的国際主義と平和への取り組みがみられることを指摘している⁴。アジア情勢を踏まえたキリスト教女性史では、神山美奈子が日本キリスト教婦人矯風会の機関紙『婦人新報』を通して、韓国併合以降の日本のキリスト者女性の立場や歴史認識を批判的に分析し⁵、日本キリスト教婦人矯風会による平和運動の取り組みへの問い直しを示唆している。

こうした日米女性の平和団体及び超教派の平和運動を扱う先行研究に対し、本研究はアメリカメソジスト派に焦点を合わせ、世界メソジスト女性連合(The World Federation of Methodist Women)(1939年)へと至る平和的連帯の形成過程を描出しながら、次の2点について考察する。第一に、WFMSの会長として活躍したエヴェリン・R・ニコルソン(Evelyn Riley Nicholson, 1873-1967)のキリスト教国際主義の思想と実践について論究する。第二に、世界親善事業の一環として将来を期待された日本のメソジスト女性の北島艶(1890-1973)の足跡を辿り、彼女の朝鮮満州伝道について探る。

1. エヴェリン・R・ニコルソンのキリスト教国際主義思想

1.1 国際宣教協議会報告

1921年にクロティルダ・L・マクダウェル(Clotilda Lyon McDowell)の後任として、WFMSの会長に就任したニコルソンは、1923年に世界親善を打ち出し、それを女性宣教活動の中心に据えた。メアリ・イシャムはニコルソンを「普通ではみられないほど、世界の出来事をよくつかんでおり、国際的な事柄に対して非凡な能力を有する、聡明で学問的な人」と評している⁶。彼女の経歴について述べれば、デポー大学時代にローマ古典研究に没頭し、卒業後、『ローマ世界』(1904年)の編集に携わり、ローマで教師生活を送っている。1906年にアイオワ州マウント・ヴァーノンのコーネル・カレッジでラテン語教授(部長)となり、女性キリスト教禁酒同盟のインディアナ支部で活躍した⁷。1917年にメソジスト監督のトーマス・ニコルソンと結婚し、その後担ったWFMSの会長職は1940年まで続けている。WFMS会長の就任時に発信したメッセージは以下の通りである。

我々の新旧宣教師の皆様

しばらくの間、私は我々の協会や他のこうした諸機関がいわゆる伝道地の文明の急激な変化を表した記事を収集すべきだということを心に留めてまいりました。そのような収集は歴史家や文化人類学者、また、社会発展にかかわる経済学者や学生だけでなく、特にすべてのキリスト教国に膨大な利益をもたらすでしょう。なぜなら、その収集は前世紀を通じて伝播された人々の慣習や生活に、キリスト教がいかに影響を与えたかを示すことになるからです。……我々はそれら諸機関と協力するだけでなく、我々宣教師も協会それ自体のアーカイブに保存すべく、

記憶に残る価値ある収集となり得る記事を入手することを提案してよろしいですか⁸。

こうした伝道地の資料を保存する重要性を説く背景には、国際宣教協議会での議論が少なからず関係していたようにみえる。すでに、1910年のエディンバラ世界宣教会議に始まるプロテスタント諸教派のエキュメニカル運動の中でアジアの女子高等教育は進展し、1919年までにアジアの6女子大学（マドラスキリスト教大学、金陵女子大学、華北女子大学〔後の燕京大学〕、華北女子医科大学、東京女子大学、ヴェロア女子医科大学）が女性宣教団体連合の後援を受け、その実を結んでいた。WFMSはこれら全校を支援したが、このうち、3校がメソジストのルーツを有していた。その後10年の間に華西女子大学、イザベラ・ソバーン大学、梨花女子大学等が連合支援を受け、教育環境を整えた⁹。宣教会議の継続委員会は1921年設立の国際宣教協議会へと発展し、ニューヨークのモホンク湖で会議を開催した。2年後のオックスフォード開催では、ニコルソンが「伝道地の教会の女性の地位」に関する講演を行い、米英のグループによって伝道地における女性の地位や生活の変化が描写された。引き続き、同協議会は大きく八つの質問項目を軸に、世界のプロテスタント諸教派・諸団体の情報収集を続けることを決議し、1927年に報告書を刊行した。その報告書の第2部にニコルソン主導の北米報告が9章（第1章アジア・アフリカ・ラテンアメリカの女性の現在の地位、第2章教会への女性の関係、第3章キリスト教教育、第4章少年少女の均衡のとれた教育、第5章儀式と習慣、第6章男女の仕事の相互関係を築くための整備、第7章奉仕への機会、第8章教会における国民女性の地位、第9章外国女性宣教師の地位）でまとめられている¹⁰。以下、第1章～3章及び第7章の日本の女子高等教育にかかわる部分を中心に述べる。

第1章では、どの国もおおよそ国民的・民族的差異にもかかわらず、同じ方向に向かっているとし、「各国で自由の先駆者である進歩的な女性の小グループが、（1）個人の独立、（2）家庭と社会生活における男性との平等、（3）同等な教育機会、（4）教会を含む公務への参加へと動いている。」¹¹と概観した上で、日本について、次のように報告した。日本では母親は家庭にいつも縛られているとは限らず、女性クラブ・博愛・福祉・改良・愛国的な活動に関心を持ち、バザー・コンサート・慈善事業等を計画している。教育面では、仙台の帝国大学が女子に門戸を開き、完全な高等教育機会を差し出す一方、その他の帝国大学では女性の学習を許可するものの、十分な特権は与えられていない。高等女学校を卒業した女性はその後、医学、歯科学、商業科、家政学において特別な訓練を受けることができる。職業面において、日本メソジストミッションは日本女性の半数が生計を立てるために家を出ていると明言する。彼女たちは女性に開かれたありふれた職業や炭鉱・工場で働いている。参政権については、成人男性の普通選挙が実施されて3年も経たないが、女性は選挙権をもたず、多くの女性が要望している¹²。

第2章では、東西の女性の地位の基本的な違いを宗教的側面から検討し、ヒンドゥー教・イスラム教・儒教・仏教の下にある女性をキリスト教との比較で論じている。ここでは、キリスト教の人格主義が強調され、「キリストは男性と分離するものとして女性の規則を定めたりしなかった」とし、「キリストは人種・国籍の障壁に関係なく、あらゆる時代の女性のために、キリストご自身の時代の女性のためになさったことをなしておられる。」と神学的理解が示される。さらに、東京女子大

学長の新渡戸稲造のコメントを取り上げ、伝道地では「キリスト教が女性を独立した人間として認めることによって女性に新たな価値を与えている」として、福音による男女平等と自由が示唆されている¹³。

第3章では、日本のキリスト教学校について、女子の職業訓練に即したサンダル（草履）製造、科学と家庭改良に現代的重点を置いた食品化学、社会全体に女性の場を広げる経済学といったような新科目が設置され、女子高等教育への要求が絶えまなくカリキュラムを前進させている¹⁴。

第7章では、西洋の女性が従事している職業や仕事で、東洋の少数の女性によって試みられているキリスト教奉仕について、次のように説明されている。

様々な国で国家主義運動につきものである強烈な愛国心は、女性にすばやい反応を呼びこす。家庭の関心事は容易にコミュニティ、さらに国家の関心事へと広げられる。そして、我々は女性が最終的に人間のウェルビーイングへの深い関心を国際的な問いにまでもたらしことを発見する。あらゆる国々からの報告は、女性がある程度の自由を得るとすぐに、ソーシャル・ワーク、人道的ワーク、ヘルス・ワークを通して、より特別に子ども・老人・病人に対して自分を表現し始めることを示している¹⁵。

愛国心をめぐる女性の反応としてのキリスト教奉仕は国家への従順というより、福祉の方面に女性の目を見開き、家庭生活を基盤に身近な地域、国家の状況から国際情勢へと関心を向けさせていることがわかる。それは矯風会、YWCA、ソーシャル・ワークの運動にみることができる。アジアでキリスト教奉仕の機会が有給化されるようになったが、高等教育を受けた女性が直接伝道ワークを引き受けるのに困難があることも指摘されている。

1.2 WFMSの宣教計画と青年の平和的連帯

WFMSの1869年創設から1929年までの制度的発達の中で、1919年から1929年の10年間は2期に分かれる。前半(1919-1923)は教育キャンペーンが計画実施され、大震災に襲われた日本の青山女学院の再建にも努力が重ねられている。後半(1924-29)はミッションナリー・サイクルとして展開され、創設60周年記念の年で締め括られた¹⁶。この2期の中間地点である1924年は、メソジスト監督教会総会において「世界平和に関するスプリングフィールド宣言」を決議した年である。メソジスト監督教会は内部的には教会が平和への意志を作り出すために、「平和への祈りが備えられ、それをどの聖餐式でも用いるよう推奨する」こと、「その教育プログラムを通して、我々の教会が現在のあらゆる民族の若者を受け入れ、平和を愛する世代へと形成する仕事を完全に担う」ことを目指した。外部的には政府による軍備縮小、常設国際司法裁判所への即時加入、国際連盟への参加を支持し、世界のキリスト教平和運動提携に向けて25名（監督5名、牧師10名、平信徒10名）から成る委員会が設置されることになった。宣言の最後では、「同胞愛の原則が挑戦を受けるのは明白なことである。」として、「リーダーシップのための機会はとても重要なので、我々は色々な場であらゆる人々

に不和分裂を生じさせる、実りのない議論を避けるよう求め、戦争から解放された世界のための、この大きな運動に人々のエネルギーを結合させていくことを求める」と表明した¹⁷。

1920年代の宣教活動は白人の人種的優越感と東洋に対する傲慢さに向き合い、積極的な平和運動に着手することが求められた。ニコルソンは世界の同胞愛に目を向け、「相互の尊重と理解と協力に基づくキリスト教国際主義」¹⁸を推進した。ニコルソンの『熟考—世界平和に関する一考察』(1928年)には、宣教活動の方向性と平和のための具体的な手段が示唆されている。本書の第5章「キリストと共に前進」で、ニコルソンは「若者は犠牲と呼ばれる人々であった。若者は戦争について相談されなかった。」と問題提起し、世界市民としての若者を詩的に表現し、「我々は中国人とお茶を飲み、アラブ人とコーヒーを飲み、パンと肉を地球のすべての人々と分け合う。我々は今日、世界市民である。……我々是我々の時代のいかなる時もこの地球市民 (the citizens of this planet) に会いに行くことができる。実際、彼らを避けることは難しいだろう。」と述べる。そして、「世界中の若者がこの相互の交わりを意識し始めている。彼らはお互いに友情の手を差し出し、お互いを知り、理解したがっている。彼らは友好的な世界を欲している。彼らは実際にそれをかなえることができる。それを築くことは彼らの力の中にある。」と、若者の連帯の必要性を促す¹⁹。

さらに、ニコルソンは世界の青年運動の実際に言及した。太平洋流域の東洋の島々では、反西洋の態度が発達しており、主として学生の青年運動の諸目的は、激しく民族的 (national) であるという。つまり、「帝国主義・物質主義・伝統主義からの解放、人間の心を縛る文化的精神的政治的束縛からの解放」を求めるものであり、友好というより権利を主張している²⁰。ニコルソンは西洋に批判的な東洋と、高慢で人種のプライドをもつ西洋に対し、「キリストは世界の平和であり、隔壁を取り除いている。」とし、「キリストに従う者は皮膚の色や家系(clan)が何であろうと、もはやストレンジャーでも外国人でもなく、同胞市民 (fellow citizen) である」と力説した²¹。そして、YMCA、YWCA、メソジスト派のエップワースリーグ、超教派のキリスト教共励会といったような青年組織を通して相互理解とフェロシップを発展させることを促した²²。ニコルソンは具体的になすべきこととして、以下の9項目を挙げている。

1. 善意のグループを形成しなさい。新約聖書の理想が実行可能かどうかを見極めなさい。その理想を試み、経験を交換しなさい。
2. 他人種・他国籍の人に役立つつきあいをしなさい。あなたの研究グループと話し、あなたとの交わりを結べるよう、他国の代表者を招き入れなさい。
3. あなたが嫌悪する人種とか人々のリストを作成しなさい。また、あなたが賞賛する人のリストも作成しなさい。どんな要因があなたの態度の中に入り込んでいますか。
4. 私たちと「外国人」の間の関係に黄金律を適用している国内および外国ミッション団体と協力しなさい。
5. もしあなたのグループが夜間クラス、保育所、職業紹介所、クラブ、遠出 (outings) を行うことができているなら、少なくとも、あなたはこのような活動に貢献できる。なお一層重要なことには、あなたが他国の代表者に個人的な友情を示すことができる。

6. 土着の芸術、産業、文学、そして、他国の人々の可能性を研究しなさい。
7. プログラム、意見、情報を交換し、海外の青年の教会グループとの協同計画を発展させなさい。
8. あなたのグループを国際連盟の中へ組織しなさい。—あるいは、会議とか協議会の中に組織しなさい。連盟に提出される問題について研究し議論しなさい。できれば、数名の外国「派遣団員」を確保しなさい。
9. 未来の世界平和に関する地方新聞・映画・教科書の影響を研究しなさい²³。

青年による東洋と西洋の相互理解という観点からWFMSのケースをみた場合、1930年に入って海外カレッジ支援運動が開始されたことが報告されている。アジアの女子学生（梨花女子大学、華南女子大学、華西女子大学、イザベラ・ソバーン大学、活水女子大学の女子学生）がアメリカに招かれ、女子大生間の交流プログラムにおいて東西相互の関心を共有する計画が立てられたという²⁴。

2. WFMSの世界親善事業とその後

2.1 「青年の年」プロジェクト

1923年から24年にかけて、WFMSの事業として「青年の年」(Young People's Year) と呼ばれるプロジェクトが実施されたことについて触れたい。その一つは、マクダウェル会長退陣にあたり制度化された、マクダウェル・フェローシップ基金 (Clotilda Lyon McDowell Fellowship Fund) に基づく取り組みである。この基金の目的は「我々（メソジスト）のミッション・スクールのコースを修了し、さらに奉仕の備えとして、アメリカの大学院での研究を希望する、前途ある外国人学生を援助すること」に置かれている。応募申請後、最初のフェローとして選ばれたのは、以下の5名である。それは、キャロル・チェン (Carol Chen 福建)、ジャネット・ホウ (Janet Ho 福建)、ヘレン・キム (Helen Kim [キム・ファルラン] 朝鮮)、北島艶 (日本)、メアリ・シーア (Mary Shih 北京) である。彼女らは本国でリーダーであり、そのうち何人かは国際舞台においてもリーダーシップを発揮しており、有望な女性たちであった²⁵。

キムは梨花専門学校（梨花女子大学）の最初の朝鮮女性校長として1939年に就任したことで有名な人物である。「梨花学堂では、創立以来宣教師の主導によって校務が運営され、教員もほとんどアメリカ人であったが、韓国人指導者養成の必要を認識していた。」²⁶ 1922年にオハイオ州のウェスレアン大学に進学し、1924年に文学士として卒業後、ボストン大学大学院でMAを取得した²⁷。ウェスレアン大学時代のキムはニコルソンに招かれ、1923年9月にデモインで開催されるWFMSの拡大執行委員会の集会に参加している。そこで、フェローシップとキリスト教活動のために世界の女性を組織するヴィジョンを描いた論文を読み上げた²⁸。その主張は「男性と共に手を取り合い、世界をよりよくするのは女性の本分」であり、「世界の幸福を完全に男性の手に委ねるのは安全ではない」というものであった。その目的は五つに集約される。一つに、世界中の平和と交わりを促進するこ

と、二つに、専門的職業に従事できるよう女性を援助し励ますこと、三つに、身体的精神的霊的な成長を阻害する悪の諸要因から女性と子どもを保護すること、四つに、女性を世界と国家の知的で誠実な市民となるよう訓練すること、五つに、いたるところで正義と公正を確立することである²⁹。このキムの提案は公式に受け止められ、後退しながらも北島の表明と中国のミリアム・ニー (Miriam Nieh) の支持により前進した³⁰。

2.2 世界メソジスト女性連合の組織化

WFMSでは1929年に国際部門が設置され、同年10月にオハイオ州のコロンバスで会合を開催した。その後、アジア情勢が満州事変によって緊迫し、日米交渉の不調は1939年7月の米政府の日米通商航海条約の廃棄通告にまで及んだ。この年はWFMS創設70年の節目にあたり、10月26日にカリフォルニアのパサデナに世界の27地域の代表者が集まった。対等な関係で世界メソジスト女性連合を組織化した³¹が、日本からの参加署名のあるはずがない。ニコルソンが開会演説をし、会長に就任した。10月28日の第2セッションで、エンブレムが提案された。シンボルの「いのちの木」は、ヨハネの黙示録22章2節を典拠とし、華南女子大学長のルーシー・ワング (Lucy Wang) によって考案されたものであり、すでに中国で用いられてきた。フローレンス・チェンの説明によれば、中国の女性にとって「いのちの木」の深い根は神からきたもので、神は木を豊かにし毎年継続して育て、葉と枝はあらゆるところで育ち、世界の問題を解決することができると考えられた³²。「いのちの木」の計画参与者として、日本からはアーサー・スギノ夫人とチヨコ・ツルタの名が記されている。世界メソジスト女性連合では目指す12の果実が次のように捉えられている。

川の兩岸で育ったいのちの木は、12種の果実を生み出し、さらに毎月その実をならした。そこで、連合の女性たちはイエスの栄光に対して、果実を生み出そうと努めるでしょう。その土地特有の土壌に植えられた、それぞれの国民の木は、12の果実を生むでしょう。それは福音の伝道、教育、医療の働き、文学、若者期、子ども期、世界平和、禁酒、農村の教育、家庭生活、異人種間の関係、経済的正義である。あらゆる木の葉は諸国民を和解させるでしょう³³。

3. 世界親善の中の日本のメソジスト女性—北島艶—

北島艶は先に触れたように、マクダウェル・フェローシップ基金でアメリカ留学した人物である。彼女はWFMS派遣のエリザベス・ラッセル (Elizabeth F. Russell) によって始められた活水女学校の初等科、中等科で学んだ。北島が入学した時、第2代校長マリアナ・ヤング (Marianna Young) の時代 (1898-1920) に入っていたが、ヤングの休暇帰国 (1911-1914) の間、ラッセルが校長代理となって校務を司っている。北島が薫陶を受けたヤングは、来日前、ハイスクールやカレッジで古典語、近代語を教えたベテラン教師である。加えて、アメリカの公立学校やカレッジで豊富

な教師経験を有していたベルサ・スターキー (Bertha F. Starkey) が1910年から6年間、活水で教えた³⁴。複数の女性宣教師から影響を受け、北島は理性と情緒の両面においてキリスト教的人格を発達させ、信仰へと導かれた。北島は「母校創立七十五周年を迎えて」で、母校の思い出を次のように述べている。

私が入学したのは明治三十四年の一月であった。……満十才の少女であった。父が私を残して帰る時さすがに私は泣き出した。その時ヤング校長は私の肩に、やさしく手をかけお母様のようにいたわつて下さった。……

中学科、後に大学部予科と変更されたが、ギリシャ語やラテン語等にも悩まされ三重苦であった。原語から英語に、英語から日本語にと訳さねば意味がわからず、勉強の時間が足りないため消燈後押入れで、ローソクの光でやつたものである。……この時代で忘れ得ぬ蜚雪会のプログラムに、シェークスピアの「真夏の夜の夢」の劇とその頃流行し出したオペラ式の「須磨の浦」、「はなれ小島」などの合唱を演じて拍手喝采を博し、新聞にうたわれた。この演出指導に当てられたスターキー先生は、ヤング先生から大目玉「活水の娘達は俳優ではありません」と。

然しこのような時代を通つて、単純なクリスチャン・スピリットは涵養され滲透した。……ラッセル先生に男性的理性と意志の強さを学び、ヤング先生に慈母の愛と忍耐とを教えられ、まどい易くあやまち多く、つまづき倒れたこの弱き者に力を與え望みを持たせ、「人もしキリストに在らば、新たに造られたる者なり古きは既に過ぎ去り、視よ新らしくなりたり」の聖言をもつて世の中に押し出して頂いた。「この宝を土の器に有りて」である³⁵。

北島の入学前、国内では文部省訓令第12号が発布されたが、活水女学校はキリスト教学校として建学の精神を貫き、その教育は「各種学校に安住させるものではなかった。」³⁶ 1911年度改訂された教育課程をみると、附属 (幼稚科3年)、正科 (小学部6年、高等女学部5年、大学部 [予科3年、本科4年] 7年)、専門部 (神学部4年、音楽科5年、美術科)、技芸部 (裁縫科、刺繍科)、師範部 (音楽師範科3年、幼稚園師範科2年) となっている³⁷。北島は大学部本科英文科で学び、さらに神学部に進学し、1916年に卒業した。

メソジスト監督教会の婦人伝道師として歩むことになった北島は、沖縄に派遣された³⁸。その後、福岡教区の宣教責任者のスターキーの協力者として、福岡社家町教会、福岡天神町教会で伝道活動を行った。スターキーは当時の福岡の教会時代を回顧し、「一九一九年からずっと一緒に住むようになった『私の冠』 (ピリピ書四ノ一) であり『私と軛を共にする者』 (同四ノ三) であった北島艶さん達に助けられつゝ、日本語と取組んで苦悶しています時與えて下さった御親切な協力と励ましに對しまして感謝の心を表わす言葉を見出せません」³⁹と述べている。

教会組織に関する限り、1920年代の日本メソジスト監督教会婦人年会は東部婦人年会と西部婦人年会に分かれ、福岡、長崎、熊本、鹿児島、沖縄、特別区 (朝鮮・満州) の6教区は西部婦人年会に属した。『教界時報』をみると、1922年4月30日から5月4日まで開催された第24回西部婦人年会について、北島が通信委員として記録したものが掲載されている。年会は第1日目の祈祷会をもって

始まり、ウエルチ監督による奨励があり、第2日目も同監督による『主の平和』について力ある勧め」が示された後、議事が進行した。第3日目にはスターキーによる朝鮮巡回報告をはじめとして、王女会、沖縄巡回、鹿児島部、熊本部、長崎部の伝道部各部の報告があった。第4日目には、女子神学校新設について、代表委員によって次の決議文が朗読された。

- (一) 東西両年会の婦人伝道師養成の爲め、女子神学校を東西両年会の中央部に新設すること。
- (二) 一九二三年に於て従来の活水女学校神学部と横浜聖経女学校とは合併し、便宜上当分聖経女学校校舎を新設神学校に使用すること。
- (三) 資金の供給相整ふ暁には、学校を東京に移すこと。之等につき質問協議は時間の都合により次回に延ばす⁴⁰。

第5日目には、メソジスト監督教会の女子神学校に関する決議及び協議がなされ、神学校組織委員東西両年会より各3名の委員を選出し、5月13日開催の東部年会最終日に神学校組織について協議研究することを満場一致で可決している⁴¹。かくて1923年4月に、活水女学校神学部と横浜聖経女学校の合併による日本女子神学院が開院した。

しばらくして、北島はマクダウェル・フェローシップ基金で1923年7月にボストン大学へ向けて出発した。その時、スターキーも一緒に渡米している⁴²。北島の留学は1923-24年からさらに、1924-25年の延長が許され⁴³、B.R.E（宗教教育学士）の取得後、論文「日本におけるキリスト教女子教育機関の発達と影響」を宗教教育・ソーシャルサービス大学院に提出し、1926年にMAを取得した⁴⁴。スターキーもまたボストン大学大学院にて1925年に「日本の女性と子どもの社会問題解決におけるキリスト教勢力の役割」という論文題目でMAを取得している⁴⁵。

帰国後、北島は日本女子神学院の教授団に加わり、宗教教育の講師となって学生の実践的なワークを担当した。ハリエット・ジョースト（Harriet J. Jost）⁴⁶と北島との共同報告「クリスチャン・ワーカーのためのトレーニング・スクール」から、男子系の青山学院神学部との提携において、男女共学の実験を試みていたことがみてとれる。

我々の男女共学ワークの一学期が終わるのにあたって、関係者全員はその時までには我々の機関が素晴らしい調和を伴ったと感じたけれども、注意したにもかかわらず、見落としがあるといけないので、その実験が成功したと告げるのには躊躇します。……三学期は長話を短くさせるほど、二学期と同様、我々は永久的な合同へと入るために本国の伝道局からの許可を待っており、日本の関係者全員がこのような計画を是認しています。

このことは実験年の間に失敗がなかったとか、近い将来、失敗がないということを意味しません。しかし、青山学院の男女共学はすべての関係者に益をもたらし得ることを意味するようにみえます。……我々は男女学生のつきあいが、全体としてお互いにあるべき状態において、相互に有益だと信じています。……

我々はこの前の報告で、我々の学校に大いに必要とされた二つのことについて、お話しし

た。それは正規の教員になった一人の女性と、我々自身のワークセンターのことです。去年の10月にボストン大学でMAを取得した北島艶先生が我々の教授団に歓迎されました。彼女は宗教教育の講師となり、我々の学生の実際的なワークを受け持っています。3月に我々は学校からあまり遠くない適切な地区に満足した家屋をみつけ、学生ワークセンターとして借りました。北島先生はその建物に自分の部屋を持ち、管理人は財政支援を必要とする既婚の神学生とその妻です⁴⁷。

1928年に日本女子神学院は青山学院神学部と合同した。1927年の在籍者数をみると、130名のうち、男子102名、女子28名となっている。青山学院神学部を男女共学化することは技術的に不可能であったが、青山学院神学部の女子部は男子部と一緒に管理され、数クラスは統合運営された⁴⁸。

ところで、YWCA機関誌『地の塩』の記事によれば、1926年7月に北島はYWCAの幹部委員に名を連ね、宗教部委員として活躍した⁴⁹が、同年秋には朝鮮に赴き、京城教会を拠点に日本人伝道に入っている⁵⁰。他方、スターキーは1925年に朝鮮派遣されている⁵¹。当時、赴任先である朝鮮の人々と日本人との関係について、F・H・スミス師は次のように分析している。

全体として、朝鮮人はたとえキリスト者であったとしても、日本人を愛するのは難しいと気づかされます。そして、我々は二つのグループ間のフェローシップを促進しようと努めてきたけれども、共通の立場は今までのところ存在していません。ソウルでは日本のクリスチャン・リーダーが幾分、朝鮮の牧師と友好的になる努力をしていますが、年長の牧師は日本語とか英語を話せず、会話を続けることさえ難しいのです。もちろん、年長牧師の心は祖国を失っていることに痛みを覚えています。より若い牧師や指導者は全員、日本語を話しますが、その多くは日本で学んできています。遠くない未来により多くのフェローシップと相互の愛と理解を願っています⁵²。

被植民者を尊重したキリスト者の交わりを希望する宣教師の語りは、北島の置かれた複雑な状況を想像させる。北島は朝鮮・満州でどのような巡回伝道を行ったのだろうか。北島報告から探してみたい。

1927年の日本メソジスト監督教会婦人年会記録（以下、年会記録）によれば、前年秋から母親の病気のためにスターキーはアメリカに帰り、その失望と損失は大きかった。朝鮮・満州には六つの自給教会、六つの半自給支援教会、七つの伝道（説教）所があり、信徒数1388名（男性671名、女性717名）に対し、15名の牧師と3名の婦人伝道師が担当した。北島は1926年10月から11月にかけて11か所を巡回伝道し、翌年4月と5月には7教会を訪問し、それぞれの場所に3～4日滞在している。ソウルの京城教会は成人会員213名のうち、女性が113名で、11月に独身の婦人伝道師ユキエ・スエダの到着後、婦人ワーク・日曜学校・青年組織が急速に成長した。平壤の自給教会では同じくクロカワが女性と子どもの間でワークを始めて以来、環境改善がなされ、スエダとクロカワのリーダーシップの下、初めて婦人会によるバザーも行われた。港町の釜山の教会では50名から成る婦人組織

が発達している。報告の最後で、北島は「朝鮮におけるキリスト教は日本人にとって特別な位置と責任を有している。日本人は日本本土で生活している人々よりも、真の国際精神を必要とする。キリスト教は正しいスピリットを生み出し、目下のような状況に必要な愛を与えることのできる唯一の宗教である。女性 は 家庭・教会・社会に影響を及ぼす力を持っている。」と述べている⁵³。

1928年の年会記録はスエダの結婚と、スターキーが14か月ぶりに当地に戻ってきたことを喜ぶ声から始まっている。中心トピックは京城の日曜学校の子どもを対象とした南道での夏期聖書学校と8月に開催された満州地区の日曜学校教師会である。前者の夏期学校は塩田事業にかかわる長の好意により、そのクラブ・ハウスを利用して行われた。小学校2年生から中学生までの35名が参加し、毎日、その日のテーマが設定され、朝晩の祈りと聖書朗読を基本に水泳・ハイキング・ゲームを組み込んだ、楽しいプログラムで実施された。後者のカンファレスで北島は日曜学校教授法と児童心理学について講義した。この時、12の全教会からの教師参加があり、そのうち、6教会が女性平信徒を派遣した。北島は「女性が数ある最も重要な委員会に配置され、男性と同じように有能に働き、当地区諸教会のキリスト者女性のリーダーシップを証していること」に感動している。世界の状況と比較すると、とても重苦しい満州の宗教状況に対して、「物質的進歩の光彩に強く引きつけられている人々のスピリチュアルな生活を目覚めさせるのに、強力なクリスチャン・ワーカーを必要とする。」と述べ、キリスト者女性のより定期的な教育と訓練の必要性を説いた。京城と釜山では少女のエップワースリーグが、女学生と若き女性実業家を対象とする2部門の中へうまく組織され、それとは別に、(裁縫等の)実業学校に通う女子のために、週1回の家庭聖書研究会も催されていることが報告されている⁵⁴。

1930年の年会記録の冒頭では、公州のベビー・クリニックにおける日本人母の会の様子が写真付きで紹介されている。その写真にはスターキーと北島も映っている。女性医療従事者のボーディングはすべての大切な幼子のいのちを愛する気持ちが強く、毎週、日本の赤ちゃんのために一日を費やした。彼女も看護婦も日本語が話せないため、若い朝鮮のキリスト者女性が通訳をしていた。ボーディングの要望でスターキーと北島が訪問する機会に恵まれ、二人はクリニックで母親たちにイエスについて話し、母親支援がなされた⁵⁵。

おわりに

すでにみたように、1920年代のWFMSは少数のアジアの女性リーダーを育てることに着手し、人種・民族・国籍・性別の壁を越えて平和的連帯に寄与する青年の育成を目指した。WFMS会長ニコルソンのキリスト教国際主義に立脚する世界親善事業は世界のメソジスト女性のネットワークの組織化の地盤づくりの要因として機能し、悪化するアジア情勢の中で正義と平和に向かって女性が連帯するよう方向づけるものであった。そのプロセスにおいて北島の担った役割をジェンダーの視点から述べる。

第一に、アメリカメソジスト監督教会における女性牧師按手が戦後に引き延ばされる中、海外で学位を取得する日本女性の伝道者養成がなされた点は重要である。メソジスト伝道者の北島は

WFMSの「青年の年」プロジェクトにおけるマクダウェル・フェローシップ基金によってアメリカ留学し、ボストン大学で宗教教育及びソーシャルサービスを学んだ。横浜聖經女学校と活水女学校神学部が合併した日本女子神学院は、後に青山学院神学部との合同へと向かったが、留学を終えたばかりの北島は実験的な男女共学のワークにかかわった。北島は日本の神学校においてリーダー的存在感をもって女性の地位を向上させ、パトリアキー (patriarchy) という男性の政治支配を緩和する働きをなした。

第二に、北島の朝鮮満州伝道における教育対象は日本の女性と子どもであったが、それはWFMSの日本宣教において日本メソジスト監督教会婦人年会の目的にかなうものであった。西部婦人年会の規約第2条には「本組織の目的は日本の女性と子どもに神の国をもたらし、本年会の女性が共に働くことができるようにすることである。」⁵⁶と記されている。日曜学校教師会から判断する限り、北島は20世紀初頭アメリカの児童心理学に裏づけられた子どものための宗教教育を推進し、教会における男女平等の取り扱いを意識化する活動を積極的に支えた。

第三に、朝鮮満州におけるスターキーと北島のパートナーシップによって、日曜学校・夏期学校等で子どもが保護され、健全な身体的精神的霊的な発達が促されると共に、医療機関内の日本人母の会において乳児を育てる女性への精神的ケアがなされたことは意義深い。この働きは神の愛を信じ、いのちへのまなざしをもって献身したささやかな平和への取り組みとしてみることができよう。

最後に、ニコルソンは青年組織を通して平和を作り出す提案を1928年に具体的に示したが、北島らの組織したメソジストのエップワースリーグがどのような次元で相互理解を促進したのかについて、残された課題となった。日本の朝鮮満州支配という重たい政治情勢の中で、北島の主張した国際精神がいかなるタイプの聖書リテラシーによってトレーニングされようとしていたのかについての検討も欠かせない。なお、1930年代の北島の動静をみると、1933年に矯風会第1回朝鮮部会総会が開催され、北島は書記に選出されている⁵⁷。彼女の矯風会での活動についてあまり語られていないので、その解明も今後の研究課題である。

註

¹ Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* (Macon: Mercer University Press, 1997), p.273.

² 杉森長子『アメリカの女性平和運動史 1889～1931年』（ドメス出版、1996年）。

³ 千葉浩美「両大戦間期アメリカ平和運動における女性宣教運動の役割」『法政研究』第78巻第3号（2011年12月）、968-988頁。

⁴ 小川智瑞恵「1928年エルサレム世界宣教会議における教育論」『キリスト教教育論集』第18号（2010年3月）、65-78頁。

⁵ 神山美奈子『わたちの日報キリスト教史』（関西学院大学出版会、2021年）。

⁶ Mary Isham, *Valorous Ventures: A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society*,

Methodist Episcopal Church (Boston: Woman's Foreign Missionary Society, Methodist Episcopal Church, 1936), p.73.

- ⁷ Robert, *op.cit.*, p.277. John William Leonard ed., *Woman's Who's Who of America: A Biographical Dictionary of Contemporary Women of the United States and Canada, 1914-1915* (New York: The American Commonwealth Company, 1914). p.689.

<https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015026074107> (accessed 01-05-2024).

- ⁸ *Woman's Missionary Friend*, Vol.54 (July 1922), pp.243-244.

<https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015030140118> (accessed 02-08-2021).

- ⁹ Isham, *op.cit.*, pp.80-81.

- ¹⁰ The International Missionary Council, *The Place of Women in the Church on the Mission Field* (London and New York: The International Missionary Council, 1927), pp.15-58.

- ¹¹ *Ibid.*, p.16.

- ¹² *Ibid.*, pp.19-20.

- ¹³ *Ibid.*, pp.37-38.

- ¹⁴ *Ibid.*, p.40.

- ¹⁵ *Ibid.*, p.46.

- ¹⁶ Isham, *op.cit.*, p.71, p.91.

- ¹⁷ Russell E. Richey, Kenneth E. Rowe, and Jean Miller Schmidt eds., *The Methodist Experience in America: A Sourcebook*, Vol.II (Nashville: Abingdon Press, 2000), pp.509-510.

- ¹⁸ *Woman's Missionary Friend*, Vol.56 (November 1924), p.396.

<https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015030140126> (accessed 02-08-2021).

- ¹⁹ Evelyn Riley Nicholson, *Thinking It Through: A Discussion on World Peace* (New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1928), p.94, p.98.

- ²⁰ *Ibid.*, pp.101-102.

- ²¹ *Ibid.*, pp.103-104.

- ²² 第一次世界大戦後の超教派のキリスト教青年組織の動向について、ローレンス・クレミンは「YMCA・YWCA及びそのカレッジ支部は青年の関心を失い、……深く関係する出来事では、学生奉仕運動（SVM）がその初期に要請に応じていたほぼ近い人数でどこも、外国伝道奉仕のためのアメリカ人青年を募集し損ねていた。事実、1世紀以上の間、アメリカ文化を通して教派にとらわれないプロテスタントの主導権を維持してきた福音主義の教育機関の形状は、突然、勢力・活力・連帯意識・影響力において大きな凋落を経験していた。」と述べ、アメリカ国内のカレッジYMCA・YWCAが新たな局面を迎えていたことが指摘されている。(Lawrence A. Cremin, *American Education: The Metropolitan Experience 1876-1980* [New York: Harper & Row, 1988], p.113.)

- ²³ Nicholson, *op.cit.*, pp.105-106.

- ²⁴ 朴宣美「戦前の東アジアにおけるアメリカ人女性による女子高等教育—アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会（WFMS）の活動を中心に—」『歴史人類』第47巻（2019年3月）、59頁。

<http://hdl.handle.net/2241/00155260> (accessed 03-27-2023).

- ²⁵ Isham, *op.cit.*, p.74, p.85.

- ²⁶ 山崎朋子編著『アジアの女性指導者たち』(筑摩書房、1997年)、38頁。
- ²⁷ 同上、39-40頁。
- ²⁸ J. Manning Potts ed., *Grace Sufficient: The Story of Helen Kim* (Nashville: The Upper Room, 1964), p.63.
- ²⁹ Rosemary Keller ed., *Methodist Women: A World Sisterhood: A History of the World Federation of Methodist Women, 1923-1986* (The World Federation of Methodist Women, n.d.), pp.3-4.
- ³⁰ Isham, *op.cit.*, pp.85-86. マクダウェルの記事「世界キリスト教女性連合」をみると、具体的に超教派の女性海外宣教連合(The Federation of Woman's Boards of Foreign Missions)の活動へと舵を取ったことがわかる。(Woman's Missionary Friend, Vol.56 [May 1924], p.170.)
- ³¹ 1939年はアメリカメソジスト教会三派が合併した年であり、WFMSはメソジスト監督教会女性国内伝道協会(The Woman's Home Missionary Society of MEC)、南メソジスト監督教会女性宣教部(The Woman's Missionary Council of MEC, South)、メソジスト・プロテスタント教会女性協議会(The Woman's Convention of the Methodist Protestant Church)と合同した。参加した代表者の27の地域はノルウェー、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ドイツ、スイス、ユーゴスラビア、ブルガリア、北アフリカ、南アフリカ(Negro Africa)、中国、福建、華北、インド、ビルマ、フィリピン、マレーシア、ペルー、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、キューバ、メキシコ、アメリカ合衆国である。(Keller ed., *op.cit.*, pp.9-10.)
- ³² *Ibid.*, p.10.
- ³³ *Ibid.*, p.6.
- ³⁴ ジャン・W・クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』(教文館、1996年)、249頁、301-302頁。
- ³⁵ 北島艶「母校創立七十五周年を迎えて」『活水75年の歩み』(学校法人活水学院、1954年)。(活水同窓会所蔵)
- ³⁶ 活水学院百年史編集委員会編『活水学院百年史』(活水学院、1980年)、71頁。
- ³⁷ 同上、73頁。
- ³⁸ 活水同窓会編『～歴史の交響～活水学院と長崎プロテスタント教会の百二十年』(香柏有限会社、2015年)、194頁。沖縄には活水の卒業生が最初に派遣され(Barbara E. Campbell, *To educate is to teach to live: Women's Struggles toward Higher Education* [New York: The United Methodist Church, 2005], p.122.)、神学科第一回卒業生(1888年)の川久保トクが伝道している。(活水同窓会編『活水』同窓会創設百周年記念号[1993年3月31日]、3頁。[活水同窓会所蔵])
- ³⁹ 『日本基督教団福岡中部教会創立七十年記念誌』(1954年)、95頁。(福岡中部教会所蔵)
- ⁴⁰ 『教界時報』第1605号(1922年6月16日)、9頁。第1606号(1922年6月23日)、7頁。(青山学院資料センター所蔵)
- ⁴¹ 『教界時報』第1606号、7頁。
- ⁴² 『日本基督教団福岡中部教会創立七十年記念誌』、3頁。
- ⁴³ *Annual Report of the Japan Woman's Conferences, The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church* (1924), p.15. (青山学院資料センター所蔵)
- ⁴⁴ Tsuya Kitajima, "Development and Influence of Christian Educational Institutions for Women in Japan", M.A. Thesis, School of Religious Education and Social Service, Boston University (1926).
<https://hdl.handle.net/2144/7224> (OpenBU, Boston University Libraries) (accessed 05-10-2024).
- ⁴⁵ Bertha Florence Starkey, "The Role of the Christian Forces in the Solution of Social Problems among Japanese Women and Children", M.A. Thesis, Graduate School, Boston University (1925).

<https://hdl.handle.net/2144/5959> (OpenBU, Boston University Libraries) (accessed 04-30-2024).

- ⁴⁶ ジョーストはカナダメソジスト教会女性宣教師として1898-99年に東洋英和女学校に奉職した（『カナダ婦人宣教師物語』[学校法人東洋英和女学院、2010年]、142頁）後、金沢時代を経て、1915年から横浜聖経女学校、引き続き、日本女子神学院の教育にかかわり、青山学院神学部女子部長を務めた。（クランメル編前掲書、138頁。）
- ⁴⁷ *Survey, East Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church* (1926), pp.23-24.（青山学院資料センター所蔵）
- ⁴⁸ *The Christian Movement in Japan and Formosa: A Year-Book of Christian Work* (1928), p.96.
- ⁴⁹ 『地の塩』第1号（1926年7月24日）、7頁。
- ⁵⁰ 『地の塩』第3号（1926年10月15日）、4頁。『日本基督教団福岡中部教会創立七十年記念誌』、76頁。
- ⁵¹ *The Christian Movement in Japan, Korea and Formosa: A Year-Book of Christian Work* (1926), p.362.
- ⁵² *Ibid.*, p.361.
- ⁵³ *Year Book, Japan Woman's Conferences, Methodist Episcopal Church* (1927), p.31, pp.73-74.（青山学院資料センター所蔵）
- ⁵⁴ *Year Book, Japan Woman's Conferences, Methodist Episcopal Church* (1928), pp.81-83.（青山学院資料センター所蔵）
- ⁵⁵ “Stories from the Stations of East Japan Woman's Conference and West Japan Woman's Conference Told chiefly in Pictures”, in *Year Book, Japan Woman's Conferences, Methodist Episcopal Church* (1930).（青山学院資料センター所蔵）
- ⁵⁶ *Annual Report of the Japan Woman's Conferences, The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church* (1924), p.24. *Year Book, Japan Woman's Conferences, Methodist Episcopal Church* (1930), p.54.
- ⁵⁷ 神山前掲書、51-52頁。

（付記）

本論文は、青山学院大学ジェンダー研究センター 2023年度・2024年度研究プロジェクト「フェミニスト神学を通して考える思想と実践の総合的研究」（研究代表者 福嶋裕子）による研究成果の一部です。資料収集にあたり、青山学院資料センター、活水学院総務課、永吉美恵子氏（活水同窓会）、塚本吉興氏（福岡中部教会）、ダリル・アイルランド氏（ボストン大学グローバルキリスト教ミッションセンター）にご高配を賜りました。ここに記して感謝します。